



## 「もうひとつ」の震災伝承：大熊未来塾の挑戦

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学経営学会 公開日: 2024-09-30 キーワード (Ja): 大熊未来塾, 震災伝承, 中間貯蔵施設, 東日本大震災・福島原発事故, 復興事業 キーワード (En): 作成者: 除本, 理史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002001247">https://doi.org/10.24729/0002001247</a>

# 「もうひとつ」の震災伝承

— 大熊未来塾の挑戦 —

## 除 本 理 史

### 目 次

- 1 本稿の背景と課題
- 2 大熊未来塾の発足に至る経緯
- 3 「もうひとつ」の震災伝承

### 1 本稿の背景と課題

2011年3月の東日本大震災・福島原発事故の発生からすでに13年以上が経過しており、人々の関心はしだいに薄れ、記憶の風化が懸念されている。そうした中で、震災の経験や記憶を継承し、将来に伝えていく取り組みはきわめて重要な意味をもつ。

震災伝承施設<sup>1)</sup>としては、福島県双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館（以下、伝承館）のような、公的施設が大きな存在感を発揮している。しかし福島原発事故では、被害者による集団訴訟で国が被告として訴えられており、あるいは福島県外でも、小学生が津波の犠牲になったケースで自治体の責任が問われたりして、行政は「中立的な第三者」とはいえない。したがって、公的施設の展示などにおいて、そうした立場性に由来する視角の限定が生じるのは避けられないだろう。同様の傾向は、公害資料館の先例においても指摘されているところである（除本・林，2023，76-78頁）。

公的施設の代表格である伝承館も、2020年9月の開館直後から様々な批判を受けてきた。開館前後の情報の「公開性」の問題が指摘され、展示の内容についても「官製伝承」といわれたように、総じて国や県にとって都合の悪いことには触れず、「復興」を過度に強調しているのではないか、といった指摘が相次いだのである（今井，2021；菅，2021；除本，2021）。

もちろん、公的施設には独自の役割があるし、伝承館の場合は、批判を受けて展示の改善などを進めている。それ自体はよいことである。しかし、公的施設とは別の角度からの展示や情報発信があってこそ、幅広い視点で教訓を検証するとともに、対話を通じて継承を進めることが可能になる。

筆者は、民間の震災伝承施設・団体をもつこうした意義や役割に注目して研究を行ってきた

---

キーワード：大熊未来塾、震災伝承、中間貯蔵施設、東日本大震災・福島原発事故、復興事業

[受理日 2024年6月10日]

(除本, 2021; 除本・林, 2023)。宮城県に本社を置く河北新報社の福島総局も同様の関心を持ち、メッセージ性の強い原子力災害の民間伝承施設を「オルタナ伝承館」と名づけ、3つの施設を紹介する連載を組んでいる<sup>2)</sup>。

ここで施設・団体と並記したのは、施設をもたない伝承活動団体も視野に入れているからである。2017年12月に発足した3.11メモリアルネットワークには、東日本大震災の伝承活動を行う個人・団体が参加しており、展示施設をもたない場合も多い。そうした団体では、被災地をフィールドとしたツアーのガイドや研修の講師、「語り部」などが活動の中心となろう。2013年に結成された公害資料館ネットワークにおいても、公害資料館とは、展示・アーカイブズ・研修受け入れ（フィールドミュージアム）の3分野のどれかの機能を担うものとされ、ハードとしての建物の有無は問わない（林, 2023, 39頁）。

本稿では、こうした展示施設をもたない民間の伝承活動団体に着目する。事例として取り上げるのは、一般社団法人大熊未来塾である。大熊未来塾は「もうひとつの福島再生」を掲げ、「官製」の伝承とは異なるメッセージを伝えようとしており、多様な立場・視点からの震災経験の継承を考えるうえで、非常に重要な実践として注目すべきである。以下では、大熊未来塾が「もうひとつ」の震災伝承として、何を伝えようとしているのかを明らかにするが、まずは、代表の木村紀夫さん（以下、木村さんと表記）の被災体験と、大熊未来塾の発足に至る経緯から述べたい<sup>3)</sup>。

## 2 大熊未来塾の発足に至る経緯

### 2.1 被災と家族の捜索

震災前、木村さんは、大熊町の福島第一原発から3~4kmほどの距離にあるご自宅で暮らしていた（図1）。同居家族は両親、妻、娘2人であった。

地震が起きたとき、木村さんは、南隣の富岡町にある勤務先で仕事をしていた。自宅は海の近くだったものの、海拔6mとやや高台にあったことも手伝って、津波の心配をしないまま、職場の片づけをして夕方帰宅した。そして、津波の甚大な被害を目の当たりにしたのである。

木村さんの父親、妻、次女が津波に襲われた。木村さんは暗い中、家族3人を捜し歩いた。しかし避難指示が出されたため、3月12日の朝で捜索は中断せざるをえなかった。

その後、父親と妻の遺体が4月に発見された。妻は自宅から50kmも南に流されていたが（茶毘に付され6月に遺骨となって戻った）、父親の遺体が発見されたのは自宅から100mほどの農地で、木村さんが捜し歩いていた場所に近かった。原発事故で避難を強いられなければ、震災の翌日には発見できていただろうし、命が助かった可能性もあると木村さんは考えている（木村, 2013）。

次女（汐凧さん）の手がかりは得られないまま時間が過ぎた。木村さんは当初、妻の実家がある岡山県に避難したが、2011年7月に長野県の中古物件を購入し、2012年春から長女とと

図1 木村さん宅と福島第一原発、中間貯蔵施設



出所) 木村さん提供資料（一部加筆）。

写真1 第9回公害資料館連携フォーラム in 福島の現地見学で  
大熊町の自宅跡周辺を案内する木村さん



出所) 筆者撮影（2023年12月16日）。

もに暮らしはじめた。その間にも、福島県に戻り汐凧さんを捜し続けたが、福島第一原発 20km 圏は警戒区域になったため、自宅周辺の搜索は、滞在時間などの制約が大きい一時立入りの際に行うほかなかった。

2013年4月から年15回の一時立入りが可能になり、木村さんは同年9月から、ボランティアの力を借りて搜索を開始した。そうした中で同年12月、それまで手をつけられなかったガレキの中から、家族の遺品がいくつも見つかった。汐凧さんの名前入りのものもあり、このガレキの中に「汐凧がいるかもしれない」と、木村さんは手がかりを得た気持ちになった（木村, 2014a, 43頁）。

しかし、遺骨が出てくるまでにはさらに年月を要した。2016年暮れから翌年3月にかけて、重機も導入しガレキの分別を行った結果、汐凧さんの遺骨の約2割が発見されたのである（木村, 2017a）。

さらに2022年1月には、沖縄各地で戦争犠牲者の遺骨を探し続けている具志堅隆松さんが大熊町を訪れ、木村さんと3日間搜索を行った。その結果、汐凧さんの大腿骨が見つかっている（阿部, 2022; 安田・佐藤, 2022）。

汐凧さんの遺品の一部は、いわき市にある「原子力災害考証館 furusato」に、木村さん自身の手によって展示されている。

## 2.2 中間貯蔵施設

2013年に木村さんたちがガレキの中から家族の遺品を見つけたころ、国は除染土壌等を収容する中間貯蔵施設の候補地選定を進めていた。同年5月から候補地のボーリング調査が実施され、12月14日には環境相・復興相が、福島県知事と大熊・双葉・楡葉の3町長に対して、福島第一原発周辺など約19km<sup>2</sup>を国有化する計画を説明し、受け入れを要請したのである。その後、2014年3月までに楡葉町が候補地から外れ、大熊・双葉の2町に集約されることになった（除本, 2014）。

木村さんの自宅が候補地に含まれていることが、彼の耳にも入ってきた。国が土地を買い取るのだというが、木村さんは売るつもりはなかった。そのときまだ汐凧さんの遺骨は見つかっておらず、前述の通り、やっと手がかりを得たばかりだったのである。

木村さんは当時、こう書いている。「汐凧たちと私を繋げているものは、唯一あの場所を置いて他にないのだから」（木村, 2014a, 43頁）。「国や行政は、国民一人ひとりの気持ちを無視して進もうとする。何の説明も打診もないままに発表される——中間貯蔵施設の土地の『買い取り』という一方的な判断にデリカシーのなさを感じる」（木村, 2014b, 49頁）。

2014年5月31日～6月15日、国は住民に対する説明会を各地で開催し、木村さんも参加した。その感想は「残念なものだった」。「あそこは私の家族3人が津波で犠牲になった場所であり、今も次女が行方不明で、捜し続けている。大切な場所を、他人に売ったり貸したりなど考

えられない。それに対し、国の方々の反応は、『知りませんでした』『誠意ある説明を……』という言葉」（木村，2014c，45頁）。

木村さんとしては、汚染された土壌や廃棄物を線量の低いところに移すことは考えられず、代替案もないことから、建設自体には反対ではなかった。しかし、自分の土地を売ったり貸したりするのはまた別の話であり、それはできないと考えていたのである。

だが木村さんは、それとは区別して、汐凧さんの捜索に環境省の手を借りることを決断した。中間貯蔵施設建設の一環として環境省の重機が導入され、国の主導でガレキの分別を行ったところ、前述のように汐凧さんの遺骨の2割ほどが発見されるに至ったのである（木村，2016，2017a）。遺骨が発見された場所は、父親の遺体が見つかった場所に近く、木村さんは自分の父親だけでなく「彼女を『見殺しにしたかもしれない』という思いが消えなくなった」という（木村，2017b，50頁）。

重機を使った遺骨捜索が終了した後、木村さんは津波浸水域で工事が進んでいくことに心を痛めていた。「大熊の自宅周辺の津波浸水域に汐凧がいることは確実と思われる。だったら、ここ全体をお墓にしてしまえばいいんじゃないだろうか」（木村，2018，42頁）。

中間貯蔵施設を含め、復興のための土木事業は、被災の痕跡を消し、見えなくしてしまう。木村さんは次のように述べる。「遺骨が見つからなくても、そのままにもらえるのであれば、慰霊の場所として残しておけばいいのかな、と思うようになりました。あそこに汐凧はいるわけだけど、全部見つければ終わってしまう。起こったことを伝えるために、あえて汐凧が見つからないようにしているような意志を感じるんです」（グリーンピース・ジャパン，

## 写真2 中間貯蔵施設（大熊3工区）



出所）筆者撮影（2021年6月23日）。

2021)。木村さんの言葉は、国の復興政策のあり方に対する異議申し立てである。

### 3 「もうひとつ」の震災伝承

#### 3.1 大熊未来塾とそれを支える人たち

木村さんは、長女が東京に進学した2019年の春、福島県に戻り、いわき市から大熊町に通うようになった。そして2020年に大熊未来塾（当初は任意団体）を立ち上げ、震災の経験を伝える取り組みをはじめた。

木村さんが震災の経験を伝えることを課題として意識したのは、2014年ごろだという（木村，2015；木村さんからの聞き取り，2024年1月27日）。2013年11月に写真家の尾崎孝史さんが、木村さんご家族の話を軸に、事故発生直後の大熊町の様子を記録した書籍（尾崎，2013）を出版したことから、2014年には東京や長野で写真展が開かれ、木村さんが講演に呼ばれたりする機会も増えていった。

そうした中で、写真家やジャーナリストとの交流が広がった。また、汐凧さんの捜索に関わる人的つながりもある。さらに、避難先の長野県では、原発に批判的な雑誌『たあくらたあ』に連載をもつようになり、自宅をイベントや交流の場として運営するようになったが、それらを通じた人間関係も重要である。大熊未来塾の活動を支えている人的ネットワークはこれらが複合していて、多様で広がりがあり、木村さんも出演する記録映画を撮った映画監督・古波津陽さんも「私も正直全貌がよく分かっていない」というぐらいである（古波津，2021，23頁）。

写真3 大熊未来塾主催「伝承の仲間づくりサミット in 大熊」  
（2024年2月11日、大熊町）の様子



出所) 筆者撮影。

### 3.2 スタディツアー

2015年2月には、木村さんを含む大熊町民の一時立入りに同行する形で、現地を実際に訪問し考えてもらうためのツアーが企画された。そのとき、木村さんは「又聞きの話聞くより当事者の話を聞くことの方が、真実は伝わると思う。さらに、現地を見て聞いてもらった方がより実感できるはずだ」と考えた（木村，2015，54頁）。一時立入りの際に大熊町の現状を見てもらう活動は、その後も近い関係性の範囲内で、機会があるごとに行ってきた。

2015年当時、木村さんは次のように書いている。「昨〔2014〕年冬、鹿の解体のワークショップを開いたときに思ったことがあった。小学校低学年以下の子供たちは、割と平気に鹿の死体に触れるのに対して、中学生の私の娘は、気持ち悪いと言って近づく事さえ出来なかった。震災体験も、考えや社会でのしがらみで凝り固まった大人たちより、これからの若い世代に伝えていけたら、世の中も変わっていくのではないか」（木村，2015，52-53頁）。若い人たちに伝えたいという思いは、木村さんの中で非常に強い。

大熊未来塾を始める前年（2019年）の1月、木村さんは阪神淡路大震災の慰霊の取り組みを学ぶため、神戸を訪れた。そこで活動する若い人たちの熱気に接し、木村さんは次のように書いている。「単純にすごいと思った。こんな取り組みをしている若者が日本中にいるのかもしれないと思ったら嬉しくなった。それに対する大熊町民としては、将来に向けてもっと積極的に外に出て行く必要性を感じた。〔中略〕震災と原発事故を経験したからこそできる町づくりを魅力的に伝え、外の若者に関わってもらえる機会を増やすべきだ」（木村，2020a，53頁）。そしてその年末、映画上映のゲストトークの中でスタディツアーの構想を話したという（古波津，2021，23-24頁）。

折しも新型コロナウイルスの感染拡大があったため、オンライン配信を活用するなど計画の変更を迫られたりもしたが（Anon.，2021）、地道に活動を続け、大熊未来塾は2022年8月に任意団体から一般社団法人に移行した。それに際して、木村さんは伝承活動の動機を次のように述べている。「『同じ犠牲を繰り返したくない』という想いがある一方で、それらの行動〔記憶を語ること〕に『汐風に近い』感覚があり、伝承活動自体が癒しでもあります」（木村，2022，63頁）。

### 3.3 木村さんのメッセージ

大熊未来塾の活動を通じて、木村さんの伝えたいメッセージとは何か。災害から身を守るこの大切さはもちろんだが、それにとどまるものではない。

大熊未来塾のFacebookページを見ると、実は団体名に「もうひとつの福島再生を考える」というサブタイトルが付されている。そして、機関誌『SoIL』の表紙には、毎号「小さきものの伝承とシンプルに生きるための提案」という言葉が載っている。この言葉をヒントに「もうひとつの福島再生」が意味するところを筆者なりに整理すると、次の2点が挙げられる。

第1は、前述した通り、現在の復興政策のあり方に対する異議申し立てである。木村さんは2023年にテレビのインタビューで、復興事業が進む大熊町の避難指示解除地域を歩きながら、次のように語っている。「(規制が)解除されるというのはそこで生活できるのと同時に、震災前のここでの営みが全部消えてしまうってことでもあるっていうのを、これを見ると痛感します」。「でも復興ってそういうことなんだろうと思います。それを含めて復興なんだと考えると、それによって、逆に言うところに残されていく人が多いんじゃないかと思う」(信越放送, 2023)。

復興事業は、被災の痕跡も、かつての町民の暮らしの跡も消していく。「小さきものの伝承」とは、復興事業によって消されてしまいかねない、人々の営みや被災の痕跡であろう。意識的に残そうとしなければ、それらは残らない。

そこで木村さんは、震災遺構を保存する活動を行っている。たとえば2020年には、自宅がある行政区の、津波で半壊した公民館が解体されるという計画が判明した。これに対して、木村さんは行政区の総会などで異を唱え、結果的に解体は中止になった(木村, 2020b, 58頁)。汐風さんが通っていた小学校についても、保存に向けた取り組みを続けている。

木村さんが伝えようとしている第2の事柄は、原発事故を経験したからこそ見えてきた、社会経済の進むべき(と木村さんが考える)方向性である。木村さんは、前掲のインタビューで次のように話す。「これだけ自分たちはがんばって復興に向かっているという話には学びはない気がする。こういう経験をしてしまったことによってあの時後悔していることがいっぱいある。そういうなかに学びになるようなものがあると思う」(信越放送, 2023)。

木村さんは自らの気づきをこう記している。「便利で楽な生活を手に入れたり、維持したりするために、人は必死に働く。忙しすぎて、薪に火をつける余裕さえなくなる。いつか、それが当たり前になる。原発事故は、そんな人間の欲望の代償なのではないか」(木村, 2014a, 45頁)。

木村さんの原発事故後の暮らしは、エネルギー多消費型、大量生産・大量消費・大量廃棄型の世の中に抗おうとする実践であった。「シンプルに生きる」とはこのことであろう。

木村さんは自らの理想を、詩のような文章で綴っている(木村, 2021, 16頁)。

津波で家族、家を失い  
原発事故では故郷を追われ  
それでも未来については  
失ったものがあるからこそ  
そうでありたい理想が生まれ、  
それは結局、今の世の中とは正反対。  
失ったものの一部は、

今の世の中だから失くしたと思えてならないから、  
見たい未来は、  
命と経済を天秤にかけるとは違う未来になりました。

将来、帰還困難区域が解除され中間貯蔵施設が役割を終えたとき、大熊町で「シンプルに生きる」ことを可能にするために、木村さんは自宅跡周辺に通い、できることから取り組んでいる。伝承の取り組みは、この目標に向けた活動の一環でもあるのだ。

「官製」伝承に回収されない「もうひとつ」の震災伝承として、大熊未来塾の活動に今後とも注目していきたい。

#### 注

- 1) 国土交通省東北地方整備局企画部が事務局を務める震災伝承ネットワーク協議会は、「震災伝承施設」を次のように定義している。「東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設」であり、以下のいずれかの項目に該当するもの。①災害の教訓が理解できるもの、②災害時の防災に貢献できるもの、③災害の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他（災害の実情や教訓の伝承と認められるもの）。①～⑤の条件を満たし、かつ「公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料又は無料の駐車場がある等、来訪者が訪問しやすい施設」が第2分類、そのうちさらに「案内員の配置や語り部活動等、来訪者の理解しやすさに配慮している施設」が第3分類である。第2分類、第3分類の条件を満たさない震災伝承施設が第1分類となる。この第3分類に区分されている施設が、ミュージアムといわれるもののイメージに近い（除本・林，2023，75-76頁）。

なお本稿では、「伝承」「継承」という表現をともに用いている。両者の間には意味やニュアンスの違いがあるし、東日本大震災においては「伝承」、公害経験に関しては「継承」が用いられる傾向があるようである。しかし本稿では、そうした違いにあまりこだわっていないため、両語をほぼ同義——将来に向けて引き継ぐ／受け継ぐ／手渡すこと——と考えていただいてよい。

- 2) 「オルタナ伝承館 原発事故13年」①～④『河北新報』2024年1月19、21～23日付朝刊。この連載をベースに、福島県における民間の震災伝承施設・団体を紹介するガイドブックを刊行する予定である（除本・河北新報社編，2024）。
- 3) 本稿執筆にあたって実施した調査等は次の通りである。

資料調査は主に次のものを対象とした。①木村さん自身が書かれた手記（避難先の長野県で発行されているミニコミ誌『たぁくらたぁ』）に連載。福島県いわき市にある民間伝承施設「原子力災害考証館 furusato」にて閲覧）、②大熊未来塾機関誌『SoIL』第1～3号、③インターネットで公開されている木村さんのインタビューや取材記事、④木村さん自身や大熊未来塾に関する新聞記事（データベース検索）、など。

木村さんへの聞き取り調査は、2024年1月27日に大熊町において実施した。その他、筆者が副代表幹事を務める公害資料館ネットワークの活動を通じて、木村さんにお話をうかがう機会を複数回もつことができた。まず、公害資料館連携フォーラム in 福島 2023 プレ企画として、トークセッション「福島の実験を継承する」を開催し、その中で木村さんにお話しいただいた（2023年1月21日、福島県いわき市「古滝屋」にて開催。録画は公害資料館ネットワークのYouTubeチャンネル〈[https://www.youtube.com/@kougai\\_nw](https://www.youtube.com/@kougai_nw)〉で公開）。また、本番のフォーラムにおいては、木村さんに現地見学の案

内をお願いし（2023年12月16日、大熊町）、2日目の「教育分科会」にも登壇していただいた（2023年12月17日、福島大学）。これらの準備段階においても、対面またはオンラインで木村さんや大熊未来塾のスタッフと何度かお話しする機会を得ている。

加えて、大熊未来塾が主催するオンライントークや報告会を傍聴するとともに、「伝承の仲間づくり サミット in 大熊」（2024年2月11日、大熊町）に現地参加して、大熊未来塾がどのような人的ネットワークのもとで運営されているのかを把握するよう努めた。

### 参考文献

- 阿部岳（2022）「福島 沖縄 国策と慰霊 [1]」『沖縄タイムス』1月11日付、23面。
- 今井照（2021）「失敗の伝承、伝承の失敗——原発事故の経験から」『年報行政研究』第56号、73-96頁。
- 尾崎孝史（2013）『汐風を捜して——原発の町 大熊の3.11』かもがわ出版。
- 木村紀夫（2013）「原発避難——大熊町から白馬村へ」『たぁくらたぁ』第28号、2-7頁。
- 木村紀夫（2014a）「白馬の森発 原発避難者の明日 第3回 新しく、一歩前へ」『たぁくらたぁ』第32号、42-45頁。
- 木村紀夫（2014b）「白馬の森発 原発避難者の明日 第4回 人の気持ちに助けられて」『たぁくらたぁ』第33号、49-51頁。
- 木村紀夫（2014c）「白馬の森発 原発避難者の明日 第5回 自分が目指すところ」『たぁくらたぁ』第34号、44-47頁。
- 木村紀夫（2015）「白馬の森発 原発避難者の明日 第6回 伝えるための模索」『たぁくらたぁ』第36号、52-55頁。
- 木村紀夫（2016）「白馬の森発 原発避難者の明日 第10回 3・11から5年半の今」『たぁくらたぁ』第40号、48-51頁。
- 木村紀夫（2017a）「白馬の森発 原発避難者の明日 第12回 おおくまから白馬、深山の雪へ」『たぁくらたぁ』第42号、54-57頁。
- 木村紀夫（2017b）「白馬の森発 原発避難者の明日 第13回 大熊の菜種油の意味、人として原発を考える」『たぁくらたぁ』第43号、48-51頁。
- 木村紀夫（2018）「白馬の森発 原発避難者の明日 第14回 岐路に立つ大熊での活動」『たぁくらたぁ』第44号、40-43頁。
- 木村紀夫（2020a）「白馬の森発 原発避難者の明日 第20回 大熊との関わりと未来を模索して」『たぁくらたぁ』第50号、50-53頁。
- 木村紀夫（2020b）「白馬の森発 原発避難者の明日 第22回 『新しい生活様式』だけでいいの？」『たぁくらたぁ』第52号、56-59頁。
- 木村紀夫（2021）「10年後にみえる未来」『SoIL』第1号、16-17頁。
- 木村紀夫（2022）「白馬の森発 原発避難者の明日 第28回 新しい価値を見出す」『たぁくらたぁ』第58号、60-63頁。
- グリーンピース・ジャパン（2021）「Lives of Fukushima 福島の記録 木村紀夫さん」  
<https://fukushimatestimony.jp/live/2.html>（2024年3月4日閲覧）
- 古波津陽（2021）「体当たりを間近で見ること——大熊未来塾誕生秘話」『SoIL』第1号、23-25頁。
- 信越放送（2023）『復興の陰で失われていくもの…』家族3人を失った男性 信州・白馬村に一時避難も…  
 原発の町から伝え続けるメッセージ」3月7日  
<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/365038>（2024年3月4日閲覧）

- 菅豊（2021）「災禍のパブリック・ヒストリーの災禍——東日本大震災・原子力災害伝承館の『語りの制限』事件から考える『共有された権限（shared authority）』」標葉隆馬編『災禍をめぐる「記憶」と「語り」』ナカニシヤ出版、112-152 頁。
- 林美帆（2023）「公害資料館ネットワークは何をめざしているか——多視点性がひらく『学び』と協働」清水万由子・林美帆・除本理史編『公害の経験を未来につなぐ——教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版、39-55 頁。
- 安田菜津紀・佐藤慧（2022）「祈りの場、そして伝える場所に——福島県大熊町、約 10 年 9 カ月を経て見つかった娘の遺骨」『SoIL』第 2 号、30-41 頁。
- 除本理史（2014）「中間貯蔵施設問題の経緯と論点」除本理史・磯野弥生・渡辺淑彦・頼金大輔『中間貯蔵施設をめぐる問題点と課題』OCU-GSB Working Paper No. 201415、1-27 頁。
- 除本理史（2021）「福島原子力発電所事故に関する伝承施設の現状と課題」『経営研究』第 72 巻第 2 号、153-164 頁。
- 除本理史・河北新報社編（2024）『福島「オルタナ伝承館」ガイド』東信堂（近刊）。
- 除本理史・林美帆（2023）「福島原発事故に関する伝承施設の現状と課題——民間施設の役割に着目して」清水万由子・林美帆・除本理史編『公害の経験を未来につなぐ——教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版、75-90 頁。
- Anon.（2021）「大熊未来塾活動報告」『SoIL』第 1 号、52-53 頁。